

地域包括ケア推進に向けた市町村への 伴走型支援の取り組みについて



©長野県アルクマ

長野県健康福祉部介護支援課

地域包括ケア市町村伴走型支援事業について

事業実施の背景

「長野県地域包括ケア体制の構築状況の「可視化」に係る調査結果」から

- ・市町村で構築状況に差があり、支援すべき内容が一律ではない
- ・地域の実状が把握できておらず、地域包括ケア体制構築をどのような取り組みで進めていけばよいか戸惑う市町村がある。
- ・「地域課題」を、「事業ができていない」と答える自治体が多い。

自治体に応じた個別・具体的な支援が必要となっている。

目的

県は、市町村が多様な主体とともに地域の実情に応じた地域包括ケア体制の構築が進められるよう支援することを目的とする。

目標

市町村が、地域課題の解決に取り組むための考え方や仕組みづくりができるようになる。

- ①市町村の役割を認識し、住民の暮らしに視点をおくことができる
- ②適切な地域マネジメントを行い、地域課題を明確にできる
- ③目指す姿に向けた事業の位置づけを理解し、保険者としての事業の必要性を住民に説明できる
- ④地域課題を解決するため、様々な事業が展開できる
- ⑤多様な社会資源に目をむけ、関係者と協働することができる

長野県伴走支援のイメージ図



県職員は市町村業務を行うのではなく、当該地域の地域包括ケア体制の構築に必要な専門職や有識者と連携しながら総合的に支援する。

長野県伴走支援の進め方(支援方法)

【期間】 おおよそ半年～1年程度 *継続支援もあり

【頻度】 約6週間に1回

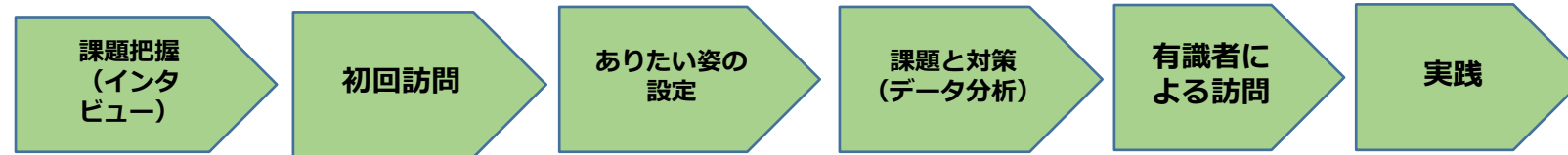
【方法】 現地訪問またはオンライン

【アドバイザー】 県内外大学教授等

【ピアサポーター】 今まで伴走型支援を受けた市町村担当者

【協力者】 長野県社会福祉協議会、管轄内の保健福祉事務所、長寿社会開発センター

【主な支援の流れ】*状況に応じ短縮等あり



【記録】

個人のアウトプット(思考整理)のため、各回終了後、「市町村整理シート」への記入を依頼

【フォロー体制】 *市町村の意向を重視し、自由参加型

- ・年1～2回フォローアップ講座開催(その後の進捗状況の確認、他市町村との情報交換)
- ・ピアサポーター活動への協力
- ・県主催「地域包括ケア推進研修」における取組報告発表



市町村が、何のために地域包括ケア体制を構築するか腑に落ち、「ありたい姿」についてチームで考え、住民とともに望む地域をつくる手伝いをする。(後方支援)

地域包括ケア体制構築状況の「見える化」について(これまでの成果)

- 地域包括ケア体制構築状況の「見える化」について、これまでの成果・課題を踏まえ、見直しを行い、2025年、2040年を見据えて地域包括ケア体制の深化・確立を図る。

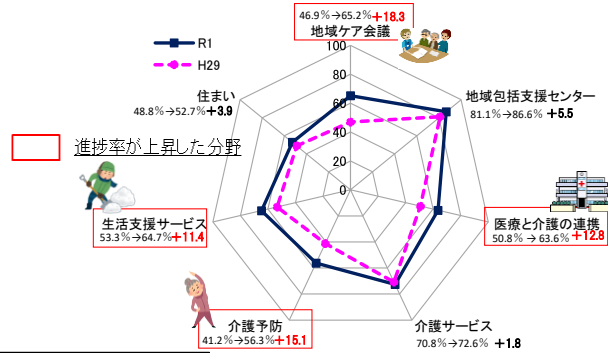
第6期・第7期計画期間における可視化調査の取組の成果

- 平成26年介護保険制度改正などにより、市町村に新たに求められた取組について、早期の着手を促し、進捗について把握するため、取組の有無や、整備状況を中心に指標を設定してきた

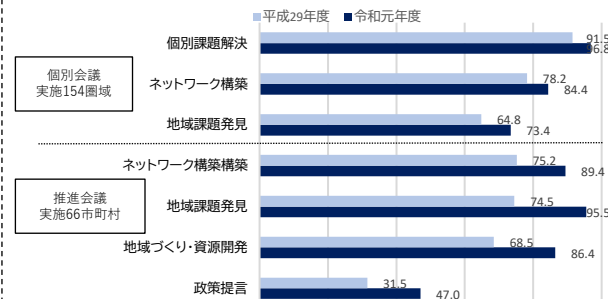
	【H26】	【H29】	【R1】
・地域ケア個別会議の開催状況	125圏域 (80.6%)	139圏域 (89.7%)	154圏域 (92.8%)
・医療と介護との協議の場の開催状況	66.9%	89.7%	95.8%
・生活支援コーディネーターの配置状況	0%	85.8%	97.0%

取組状況について着実な進捗を確認

これまでの調査項目の例



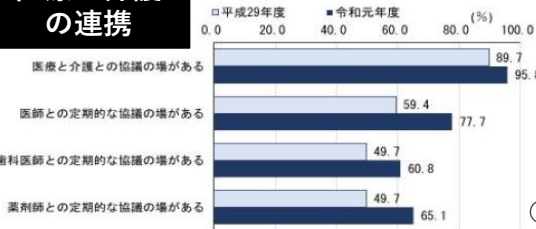
地域ケア会議



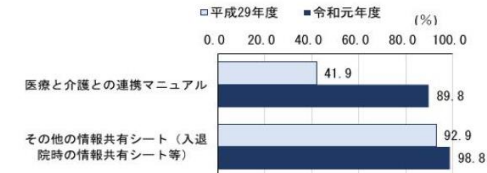
- 会議設置の有無、機能の有無は把握可能

医療と介護の連携

【医療と介護の協議の場】



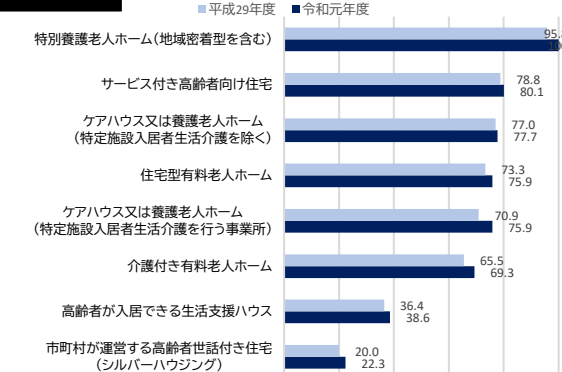
【情報共有に向けた連携ツール】



- 場の有無、ツールの有無は把握可能
- 実際の在宅介護の進捗状況などは把握できない

住まい

【高齢者向け住まいの整備状況】



- 住まいの各種別の有無は把握可能
- 地域に必要なものの評価とはなっていない
- 所得状況等に応じた住まいの充足率は不明

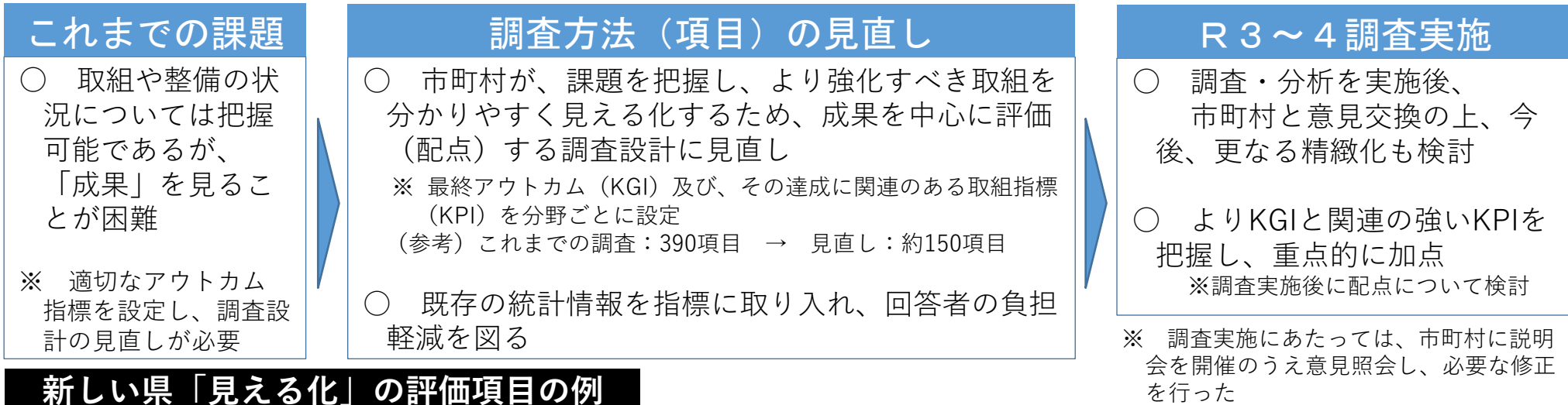
生活支援サービス

【生活支援サービスの実施状況】



- 生活支援サービスの有無は把握可能
- 地域における高齢者の生活ニーズを踏まえての充足率となっているか不明

第9期の地域包括ケア体制構築状況の「見える化」について



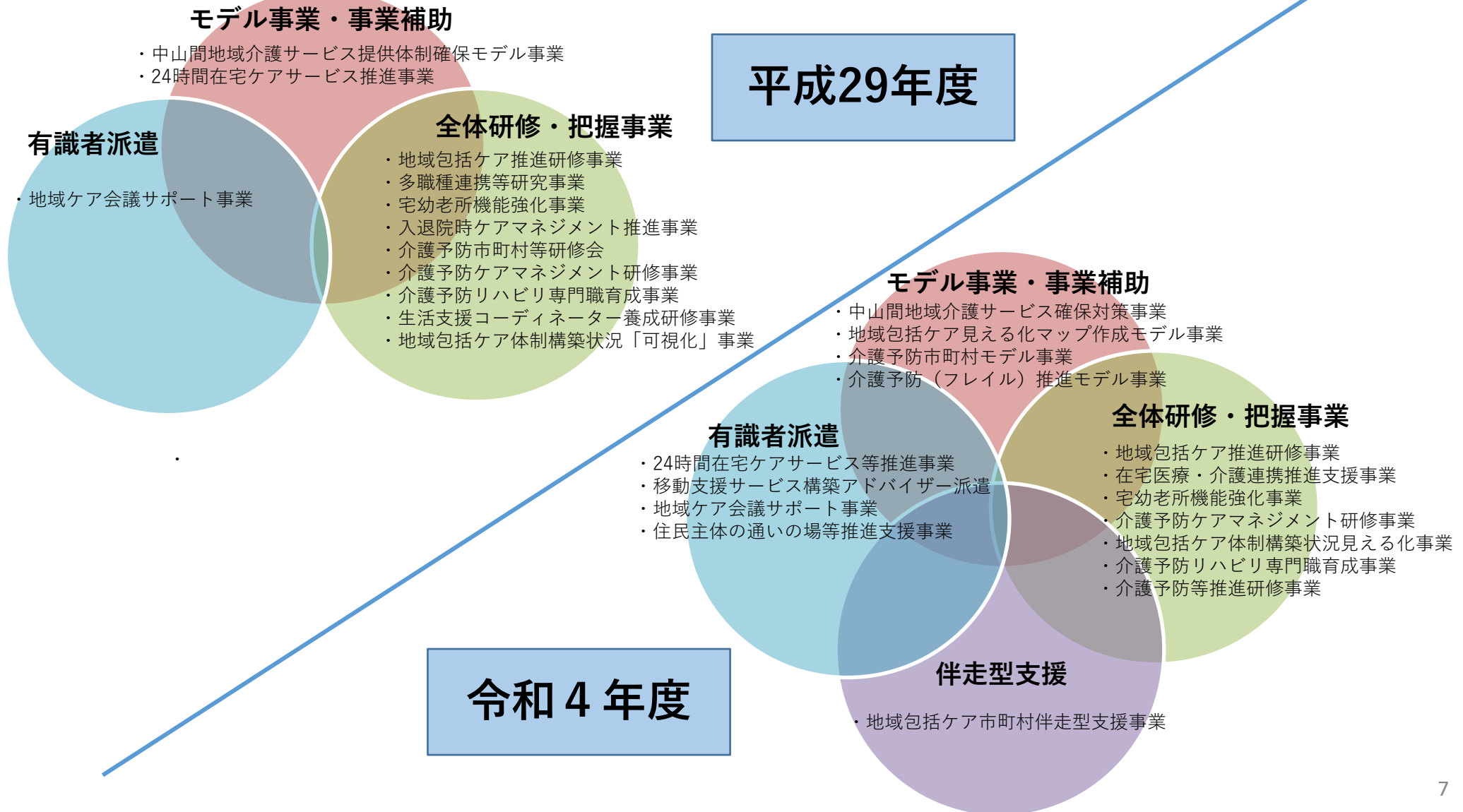
新しい県「見える化」の評価項目の例

分野	最終アウトカム(KGI)の例	中間アウトカム(KPI)の例
介護予防	<ul style="list-style-type: none"> ・健康寿命(日常生活動作が自立している期間) ・年齢等調整済み要介護認定率 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会参加意欲 ・閉じこもりリスク高齢者の割合 ・要支援者のサービス利用1年後重症化率
生活支援	<ul style="list-style-type: none"> ・元気高齢者の幸福感 ・社会参加・参画度 	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅療養率 ・要介護3以上の者の在宅サービス利用率 ・生活支援サービスの充実を必要と感じている者の割合
医療と介護の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅死亡率 ・老人ホーム等死亡率 	<ul style="list-style-type: none"> ・ACPの実施割合 ・入退院時の情報提供率 ・退院調整の実施率
住まい	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅療養者の満足度 (・施設入所者の幸福感・満足度) ※現状、数値の取得は不可 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設入所を希望する理由が「住まいの構造」のみの割合 ・特養の入所待機期間 ・特養及び有料老人ホーム等利用者の所得段階割合
介護保険の信頼性	<ul style="list-style-type: none"> ・健康寿命(日常生活動作が自立している期間) ・満足度(必要なサービスが過不足なく提供) 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護給付の見込(推計)との乖離率 ・要介護認定率の見込との乖離率 ・要介護リスクの抑制

※ このほか、アウトプット指標、ストラクチャー指標など、参考指標も含めて必要な調査項目を設定

長野県 地域包括ケア体制構築支援関連事業の一例

県では、市町村ごとに異なる状況に対する支援として、有識者派遣や伴走型の支援など、より個別具体的な支援策に重点を置いて市町村支援を実施している。



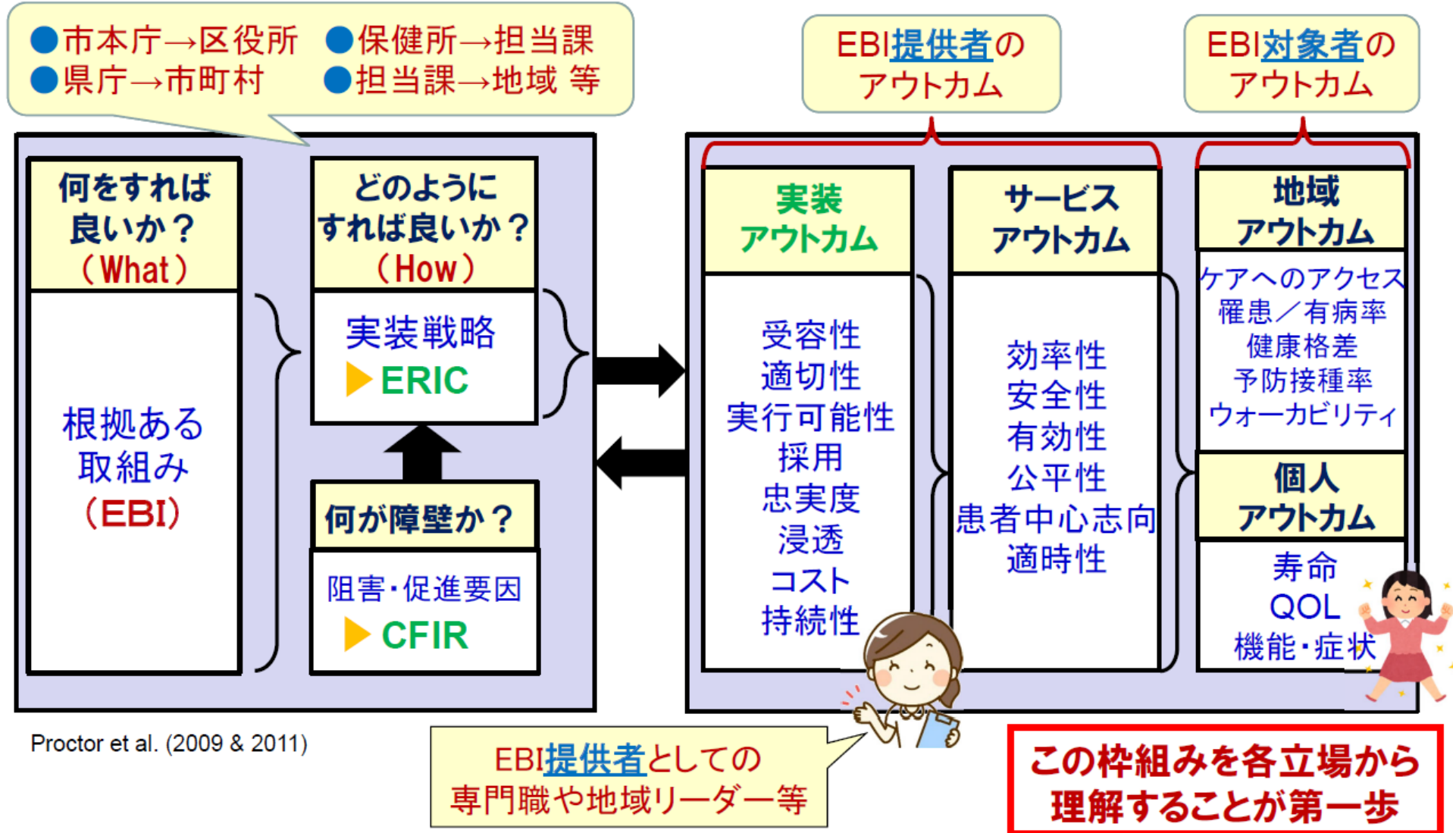
エビデンスに基づく介入

実装科学とは

実装科学implementation scienceとは、学際的なアプローチにより、患者、保健医療従事者、組織、地域などのステークホルダーと協働しながら、エビデンスに基づく介入 (evidence-based intervention、EBI)を、効果的、効率的に日常の保健医療福祉活動に組み込み、定着させる方法を開発、検証し、**知識体系を構築**する学問領域である。

普及と実装研究とは、そのために行われる研究である。EBIを組み込む場としては、臨床現場、**行政**、職場、学校、**コミュニティ**などがある。

実装のプロセス



Rinad S. Beidasら, Orientation to the Science of Dissemination and Implementation, 2018 (11th D&I Science Conference)資料を改変

※U.S. Department of Health & Human Services, National Institutes of Health. Implementation Science at a Glanceを参照

14

実装科学の考えを取り入れた経緯

	課題	実装科学を基にした対策	期待される結果・意義
市町村	異動があり、ノウハウが積み重なって いかない。 (異動により最初に戻ってしまい、 関係者や住民が混乱する)	(県) 市町村の取組みに対する チェックリストの開発 ・CFIRを用いた阻害促進 要因の特定(⇒質問表を作成)	・異動に左右されず、内容(質)を 維持・向上させながら事業を推 進できる。 ・今までの進捗状況を確認しなが ら、どう進めていくとよいか分か る。
県	市町村支援方法が一般化されて いない。	県による市町村支援方法 (実装戦略)の一般化 ・実装戦略(ERIC)に基いた シートの開発	支援方法の統一化
市町村・県	事業の取組にする評価指標がない。	市町村・県が取組を評価できる シートの開発 ・市町村・県の実装アウトカム 指標の設定と評価	事業評価を行い、PDCAサイクル を回す ブラッシュアップ

実装科学の考え方を取り入れた市町村支援について

①CIFR(阻害・促進要因)を用いた市町村へのインタビュー(R3年度～)

【方法】 伴走型支援で、初回の市町村ヒアリング時に活用。

【効果】 CIFRの項目に沿ってインタビューを行うことで、客観的・論理的思考でインタビューが行え、個人の主観に左右されない。
阻害・促進要因をいち早く特定でき、有識者等関係者と状況を共有しやすい。
後々、経過を振り返る際にも役に立つ。後追いしやすい(引継ぎやすい)。

②ERIC(戦略)・実装アウトカムの考えを用いた評価指標の作成(R4年度～)

【内容】 市町村が自ら事業の振り返りができるよう、事業のプロセスを振り返るための評価指標を作成。評価指標については、事例検討を踏まえながら、市町村とともに検討。

【効果】 成功例のプロセスを振り返り、客観的に要因を確認していくことで、事業の振り返りができる。現状の立ち位置が見えやすい。
(どこまでできていて、どこからができていないのか確認しやすい。)

実装科学の考え方を取り入れた市町村支援について

①CIFR(阻害・促進要因)を用いた市町村へのインタビュー(R3年度～)

※一部紹介

CFIRを活用したインタビュー項目		市町村：					
日時： 年 月 日 (時分～時分)							
対象者：							介入対象
インタビュアー：							太字：ファーストクエスション 細字：セカンドクエスション
A 介入対象を推進するうえでの課題や強み							
1 過去に実施した取り組み内容							
項目	インタビュー言葉	ねらい	CFIR項目	概略	備考	回答	結果
1 現在取り組んでいること	介入対象 で、今やっていることを教えてください。 - 盛り上がった話題、苦勞されたことや、工夫してきたことはありますか？	今の活動内容について知る。			・今の活動状況と事業の目的を聞く順番については、お互いの関係性を考慮しながら臨機応変に行う。		
2 取組みの実施にあたり、感じていること（下記の項目について確認）							
①取組みの重要性に関する関係者（役所内、協議体、社会福祉協議会等）の認識	●取り組んだ経緯を教えてください。 - この事業を担当したとき（委託されたとき）、事業について誰からどのように伝えられ、それをどう理解し、どう進めてきましたか？ ●現在、 介入対象 が目指していることは何ですか？	・自発的に取り組んでいるか認識を確認する。 ・何の目的で何をするために 介入対象 を開催しているのか。	I 介入の特性 A 介入の出処	介入の開発が外部的なものか自発的なものかについての、主要なステークホルダーの認識。			
	● 介入対象 は、今まで関係機関（社協や委託先機関など）が行ってきた活動と比べて、似ているところや違うところがありますか？ ※関係機関向けの質問	価値観と規範の一致	III 内的セッティング D 実装風土 2 適合性	関係者が介入に付与する意義と価値観との間の明確な適合の程度、それらが個人の規範、価値観、認識されたリスクとニーズに合致する程度、および介入が既存のワークフローおよびシステムに合致する程度。			
	● 介入対象 について、上司や管理職は理解をし、支援をしてくれますか。		E-1 リーダーシップ エンゲージメント	リーダーとマネージャーの実装へのコミットメント、関与、及び責任			

実装科学の考え方を取り入れた市町村支援について

②ERIC(戦略)・実装アウトカムの考えを用いた評価指標の作成(R4年度～)

※現在検討中

評価項目	目的：健康寿命の延伸	対象となる事業：		
	使い方：自分たちがやっていることを都度振り返り、さらによくしていく手がかかりとする	現在実施していることは機能しているか？	なぜ機能している、していないのか？	現在実施していることの価値をどのように示すか？
実装アウトカム	定義・内容 (○実装のアウトカム ●RE-AIMの定義)	項目	要因 (CFIR)	戦略
計画		<ul style="list-style-type: none"> 目標、期間、範囲とターゲット 		<ul style="list-style-type: none"> 担当者が住民の「やりたい」気持ちやつぶやきをを拾い、形にする
受容性	○プログラムの介入に関するステークホルダーの認識 (やろうとしていることに対し、住民、行政、社協等が肯定的にとらえているか)	<ul style="list-style-type: none"> 認識を統一するために目的等の共有を図ったか 介入に対する価値観の確認、関係者の価値観の一致 (行政と住民、関係機関等の認識の一致) どれくらいの地区で認識が一致しているのか 		<ul style="list-style-type: none"> 対話 相手に腑に落ちる説明 ヒアリング アンケート 視察
採用	○介入を利用するというステークホルダーの意思。 ●プログラム・事業を実施した(しようとしている)提供者の数、割合、代表性。 ・どれだけの人・団体がかわったかみる指標	<ul style="list-style-type: none"> どれくらいの人が関わっているか 協働した組織の割合 		<ul style="list-style-type: none"> 民生委員の協力
適切性	○実践の場、集団、問題に、そのイノベーションまたは介入が合っているという認識 (この地域に適切だと思っているか)	<ul style="list-style-type: none"> ニーズに基づいて適切な介入が行われたか 今やっていることが地域性に合っているか 意味があると思っているか 地域にフィットしているか 		

実装科学の考え方を取り入れた市町村支援について(市町村の感想)

①CIFR(阻害・促進要因)を用いた市町村へのインタビューを受けて…

- ・自分たちがやってきたことを言語化することで考えの整理ができた。
- ・改めて自分がやっていること(業務)について考えたり、振り返る機会になった。
- ・一緒に業務に携わってきた担当者の思いを知れた。
- ・また明日から頑張ろうと思えた。

②ERIC(戦略)・実装アウトカムの考えを用いた評価指標の作成のための勉強会に参加して…

- ・正直難しい部分もあるが、自分の中でモヤモヤと考えていたことが、見える化することで少しスッキリした気がする。
- ・評価は必要と思いつつ、普段の業務の中でなかなかできていないので、勉強になる。
- ・好事例を共有し評価指標について勉強することで、他の市町村の良い取り組みを知れて勉強になる。
- ・市町村同士繋がれる機会になっている。

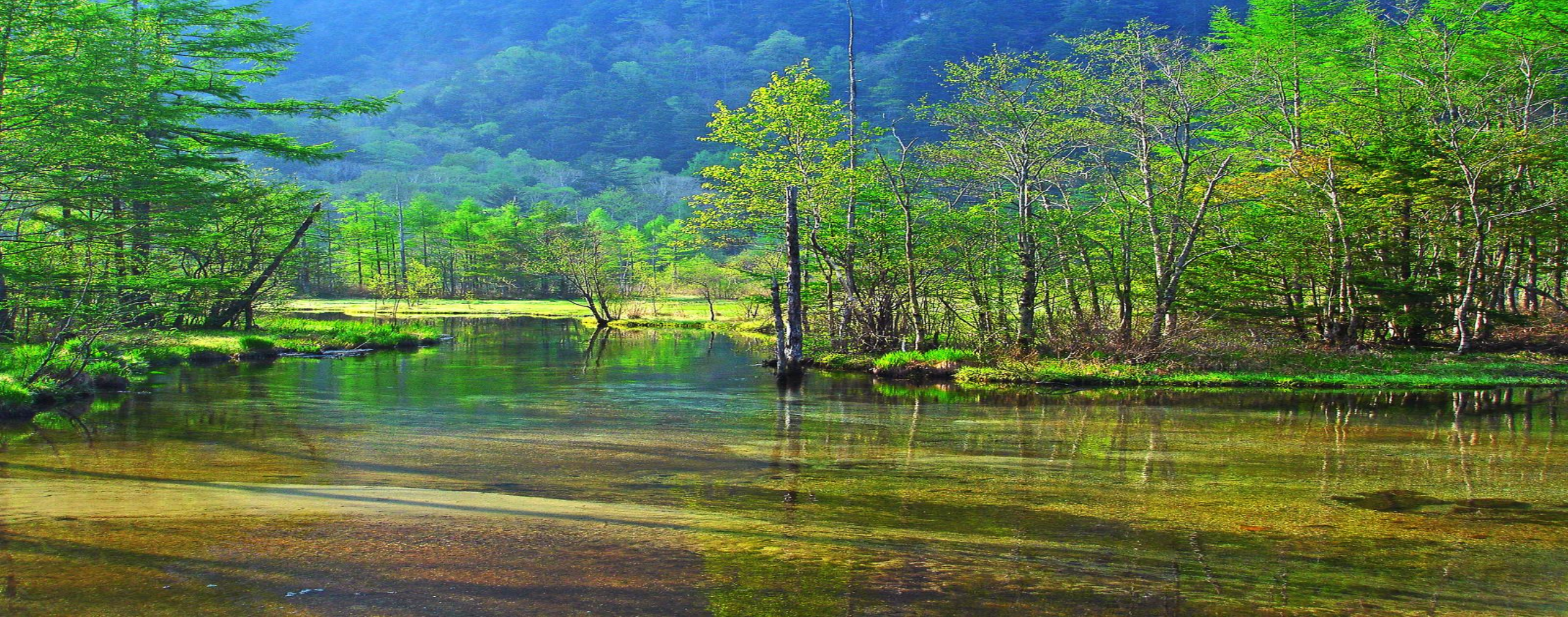
今後の保健師活動において大切にしたいこと

- ▶ 客観的指標を用いて、エビデンスにより介入する
- ▶ 支援プロセスを見える化し、振り返りながら、関係者で共有する
- ▶ 組織や地域に根付かせる体制を作る
- ▶ 対話による関係づくりを大切にする



支援プロセスを明らかにし、根拠を持って支援を行うことで、行政の異動に左右されない体制づくりを行う。

⇒ 持続性と質の担保



がんばろう
信州！

長野県 PR キャラクター「アルクマ」
©長野県アルクマ

ご清聴ありがとうございました